

小学校外国語教育推進に向けての一考察 ～出前講座を通して～

地域教育支援部 地域教育支援部長 西山 由美
主任研究主事兼指導主事 入矢 完

要約

新しい学習指導要領への移行期間中における教育課程並びに学習指導等の取扱いについては、平成29年7月7日付で「小学校及び中学校の学習指導要領等に関する移行措置並びに移行期間中における学習指導等について」（29 文科初第 536 号 文部科学事務次官通知）において示された。

京都府総合教育センターは、校内組織の活性化、学校等での研修を支援するため、かねてより出前講座を実施しており好評を得ている。来年度の移行期間中における学習指導等への要望を受け、11月より出前講座「小学校外国語教育講座」（以下「出前講座」）を新規に開講することとした。実施時期終了の2月末までの4か月間に、31件824名の受講があった。また地域教育支援部は、北部地域の教育に関する研究及び支援を担うため平成27年度に設置された部であるので、北部地域への出前講座（15件473名）を担当した。

本研究では、学級数が少なく担任団の形成が難しい規模の学校が多い北部地域に適した校内研修の在り方を、テキストマイニングによる分析を基に小学校・中学校教員2方向からの視点で考察を加え、結論として各学校へ、①外国語学習モデルプランを提案、②OJTを補完するセンター研修講座の創設・改善を提供したい。

キーワード：小学校外国語教育、国語との関連、文字指導、OJT、小規模校、指導力向上

1 問題意識とその背景

平成30年度からの移行期間における外国語教育の指導方法の改善が課題となっている。時間数増に伴うALTの配置の難しさもあり、担任が1人で指導する場面が多くなると予想される。不安を抱える教員・学校に対して、自信をもって指導してもらえよう出前講座の内容を工夫・改善する必要がある。

直山(2017)は、小学校外国語教育における課題を4点指摘している。

- ①外国語活動の授業を見たことがない教員がいる
- ②外国語教育に関する校内研修が一度もない学校がある
- ③ALT等の外部人材に指導を丸投げしている学校がある
- ④2020年には退職を迎える管理職のなかに、無関心な方もいる

この課題の根幹には、“新しいもの”への不安感や負担感があると述べ、解決に向けては、「正しい情報」を理解してもらうことだと結論付けている。

上記4つの課題を解決するために、文部科学省は「英語教育推進リーダー中央研修」を主宰し、次に中核教員への伝達講習、さらに中核教員による授業実践を伴う校内研修へと進めることで、各

学校一人一人の教員の指導力の向上につなげようとしている。

文部科学省は教員研修について様々に努力を行っている。一人一人の指導力の向上までの道筋を付け、教員が自信をもって児童の前に立ち、生涯にわたって必要となる英語教育の素地や基礎を養おうとしている。府及び市町（組合）教育委員会も同様である。それぞれの組織が焦点化して研修を実施しており、何層にも複数の研修が存在する。

2 研究の目的

これらの現状に加えて、今回の出前講座を実施することが年度途中に決まった背景には各学校からの切羽詰まった要望がある。出前講座は、教員一人一人の心に届き、外国語活動の指導イメージが実感できることにより戸惑いや不安感を解消する内容になることを目指して実施した。

また、担任団の形成が難しく、加えて教員の中に英語に堪能な者がいない小規模校において、どのような方で指導力の向上を図っていくのかを提案することも目的とした。

3 研究の方法

(1) 出前講座の工夫改善

ア 訪問体制

英語教育推進リーダー及び中核教員は、ほとんどの場合、英語が好きな（得意な）教員が担当することが多い。

しかし、研究の目的である外国語の指導力向上を達成するため訪問体制としては、あえて英語が得意とはいえない小学校教員と中学校英語科教員とがペアとなり役割分担をして出前講座を実施することとした。

イ 講座内容の工夫

内容については、担任からのニーズが高い、1 単位時間の授業の流れに焦点を当てて実施した。（図 1）

講座の前半は、移行期間中の時間数の留意点及びデジタル教材の効果的な使い方、教材づくりのヒントを伝えた。後半は、導入・展開・まとめという授業の流れに沿って実際に授業を行い、児童役を体感する中で授業づくりのポイントをつかんでもらおうとした。短時間の講座であるので、Small Talk のような英語でのやりとりの場面では、児童役から先生役に交替してもらい、教員役も体験してもらうことで自信につなげるように工夫した。

また、随所で 1 学年 1 学級の場合を想定した教材研究のヒントを提案した。

- （例）・ Small Talk をスタートにして、授業の中で英語を使ってみる場面を増やしてみませんか？
- ・ Sounds & Letters では、最初にジェスチャークイズを取り入れた楽しい活動から始めてみませんか？



図 1 出前講座の様子

ウ 講座内容の改善

受講者アンケート（以下「アンケート」）分析→リフレクションのサイクルで改善を繰り返した。第三者の評価として、他教科及び他校種のセンター所員による聴講を依頼し、客観的な視

点からの意見も取り入れて内容を改善した。

具体的には、15件の出前講座のうち、前半期（7件目まで）の内容の中から、各校に浸透してきている移行期間中の時間数の留意点の説明は減らし、後半期（8件目から最後まで）ではデジタル教材の効果的な使い方の時間を増やし、何をどのように使えばよいかを明確にした。加えて、1単位時間の授業の流れにより焦点化することを意識し、実際に授業を体験してもらうように改善した。

(2) アンケートの分析方法

出前講座全体を振り返り、アンケートやエピソードを改めて分析し、類型化した上で、小学校教員、中学校英語科教員としての考察を加えた。

自由記述の分析はテキストマイニングの手法を用い、小学校外国語の特性に応じた校内研修の在り方、授業改善の提案を行う。

4 結果

(1) アンケート分析から

出前講座の内容の工夫改善も含め、受講後にどのような満足が得られたかを検討するため、アンケート（表1）を実施した。

受講者385人についての結果（図2）が示しているように、(1)～(3)のどの設問についてもおおむね高い満足度が見られた。

表1 アンケートの設問項目

- | |
|----------------------------------|
| (1) 研修の内容（講義、演習等）は、満足できるものでしたか。 |
| (2) 使用（紹介）した教材、資料などは満足できるものでしたか？ |
| (3) 今後、あなたや学校にとって役立つものでしたか？ |

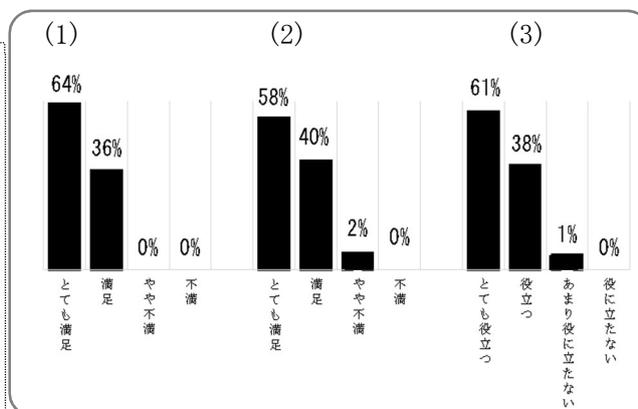


図2 アンケート結果

次に、設問(1)の満足度に関して、前半期と後半期で比較した満足度の変化（図3）を示した。

前半期より後半期のほうが「とても満足」と答える受講者が増えたことが分かった。

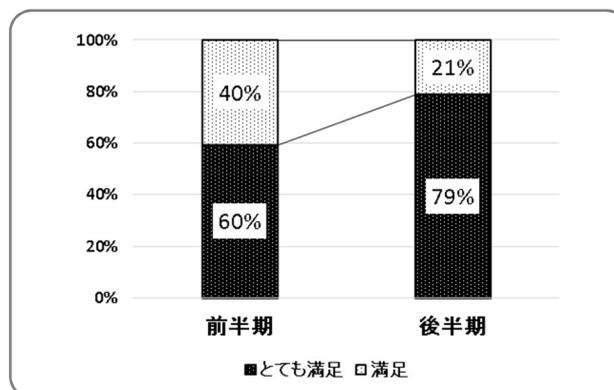


図3 設問(1)における満足度の変化

(2) テキストマイニングによる分析

有効回答者は 81 名であり、テキストマイニングはユーザーローカルテキストマイニングツール（<http://textmining.userlocal.jp/>）による分析とした。

分析の結果、85 単語が抽出された。さらにそれら 85 単語のうち、頻度 5 以上の 27 語を抽出した（表 2）。

次に頻出語 27 語を対象とし、テキストマイニングツールの階層的クラスタリング法を用いて、クラスタ分析を行った。クラスタ分析の結果、6 つのクラスタに分類され、それぞれのクラスタに命名をした。

1 つめのクラスタは「イメージ」「授業」「不安」で構成されていたため【問題意識型】、2 つめは「研修」「感じる」「児童」「発音」「必要」などで構成されていたため【積極的対応型】、3 つめは「子ども」「楽しむ」「外国語」で構成されていたため【慣れ親しみ（子供目線）型】、4 つめは「教える」「英語」「使う」で構成されていたため【自己英語力向上型】、5 つめは「学べる」「楽しい」で構成されていたため【慣れ親しみ（教師目線）型】、6 つめは「分かる」「デジタル」「教材」で構成されていたため【新教材型】とした（表 3）。

もっとも多くの単語があったのは、2 つめのクラスタ【積極的対応型】であった。

表2 頻出語(頻度5以上)

順位	語	出現頻度	順位	語	出現頻度
1	授業	26	14	準備	8
2	不安	20	14	必要	8
3	分かる	16	14	使う	8
4	外国語	15	18	発音	7
4	感じる	15	18	指導	7
4	教材	15	20	楽しむ	6
7	英語	14	20	ワークシート	6
8	子ども	11	20	内容	6
8	研修	11	20	進める	6
8	楽しい	11	24	児童	5
11	教える	10	24	聞く	5
12	デジタル	9	24	考える	5
12	学ぶ	9	24	学べる	5
14	イメージ	8			

表3 クラスタリングの結果

クラスタ	クラスタ名	単語数	単語
1	問題意識型	54	イメージ、授業、不安
2	積極的対応型	98	研修、感じる、児童、発音、必要、進める、学ぶ、聞く、考える、準備、指導、ワークシート、内容
3	慣れ親しみ(子供目線)型	32	子ども、楽しむ、外国語
4	自己英語力向上型	32	教える、英語、使う
5	慣れ親しみ(教師目線)型	16	学べる、楽しい
6	新教材型	14	分かる、デジタル、教材

5 考察

小学校外国語教育講座を 11 月からの 4 か月間に 15 回実施した。PDC A サイクルに基づき内容を改善し、受講者の学びが最大限になるよう取り組んだ。

この後、(1)ではアンケートの集計結果と自由記述を基に、教員の意識について 3 点にまとめる。(2)(3)では講座の担当者の視点（小学校教員、中学校英語科教員）から考察を加える。

(1) アンケートから見える教員の意識

ア 不安が縮小し前進しようとする意識

【問題意識型】【積極対応型】にみられる意識である。出前講座を受けて、課題の大きさに改めて気付いたが、何とか頑張っていこうという姿勢で、最も記述が多かった意識である。

- (例)・ 「今日のような学習が45分の中でできるのかと少し不安に感じました。自分の学級の今の子どもたちでは時間的にも厳しいかもしれないと感じています。しかし少しずつ取り組んでいくことで子どもたちの力を付けていきたいと思います。また自分自身の不安感をなくすために研修に積極的に参加する大切さを改めて感じました。」
- ・ 「実際に授業をしていただき、どのように活動したらよいか体験を通して学ぶことができました。英語の学習にふさわしい雰囲気をつくる！ある程度の単語は身に付けておく！必ず教材研究（予習）をしておく！この3つを意識して授業をしていきたいです。」
 - ・ 「楽しく学びました。気負わず楽しくやっていくのがベストだと思いました。」

これらの感想に見られるように、具体的な授業場面を演示することで不安が取り除かれ、教材研究を試みようという姿勢が醸成されたと推測する。

イ 自分が楽しむことで授業も楽しくしようとする意識

【慣れ親しみ（子ども目線）型】【慣れ親しみ（教師目線）型】にみられる意識である。まず自分が外国語の学びの楽しさやことばの面白さに気付き、それを突破口に指導をしているという意欲ある記述が見られた。

- (例)・ 「自分が楽しんで授業をすることが、子どもも楽しめる授業には大切だと思いました。自分の授業の型を作り出すための土台となるものが必要だと思いました。」
- ・ 「外国語の授業をしていくということに対して、ものすごく不安を感じていましたが、どのように進めていけばよいかの見通しを持つことができました。自分自身、英語の授業が嫌いだったのですが、子どもたちに嫌い・苦手と思わせないように、楽しんでできる授業づくりをしていきたいです。」

これらの感想に見られるように、講座での学びが、自身の指導技術や自らの姿勢だけでなく、子どもたちへのつながりを意識した内容であり、主体的に学びに向かおうとする態度が醸成されたと推測する。

ウ 正しい情報を得たことで不安になる意識

【自己英語力向上型】【新教材型】にみられる意識である。これまであやふやに理解していたものが正しく理解され、不安が増したという記述が見られた。

- (例)・ 「準備するだけで、何十分とかかりそう……。10分休憩の間に、DVD、PC、大型TV、カード等がそろっている状態にするのは非常に難しそう。」
- ・ 「自分たちが日常使っている日本語をベースとして学ぶ国語・算数などの教科と違い、普段あまり使わない外国語の難しさを感じた。またテストをする教科でもなく、その点でも全く違う。単語や文法が繰り返し小3～中3の中で出てくると

いっても、親しむだけではならず、理解し、覚えなくてはならない。当然理解できない状況であれば復習や宿題、補充をしていく必要がある。普段使わない外国語である分なおさらであるように思う。そうなった時、英語嫌いにせず、かつ理解させる難しさを感じた。」

出前講座の内容から、外国語活動の時よりもより高度化している学習内容に戸惑いが広がっているように推測する。

以上3つの意識に分類したが、どの意識の根底にも、よりよい学びを子どもたちに届けたいという教員としての強い責任感とよりよい状況へと高めようとする情熱が感じられる。

「今日の講座を通して、ますます不安になりましたが、教材が届いたら目を通します。」や「校内研修はしていますが、今日の講座でより具体的にイメージでき、学校として準備していくべきことも分かりました。」の記述のように、一人一人の指導力の向上へつながる準備が進むのではないかという手応えは感じた。

(2) 出前講座の担当者の視点～小学校教員からの考察～

担当者として、今回の出前講座の構想、実施、改善、効果測定をする中で感じたことを、小学校教員の立場で述べる。

ア 模擬授業スタイルの重視

最も大切にされたことは、模擬授業を講座全体の中心に置いたことである。

5・6年生の担任として、「外国語活動」の指導経験を積んできていると思われるが「教科化」への対応は誰もが未知の領域である。

どのような授業展開を行うのがよいのか、どのような視点で評価をすればよいのかなど、不安なことが多いため、まずは一人一人の先生方に「授業イメージ」を広げてもらうことが大切であると考えた。

イ 受講者の力量アップへの2つのアプローチ

図4は、出前講座をどのように行うことが受講者の力量アップにつながるかを図式化したものである。

①のイメージは、出来上がりつつある料理に最後に調味料を加え仕上げるイメージである。②のイメージは、料理を作るための火力であり、そもそもの原動力を表している。

小学校の外国語科について、①は、新しい理論や様々な実践事例を紹介し、受講者の指導力を向上させ、力量アップを図るものである。例えば、移行措置、新教材の内容を理解することなどが想定される。②は、まずは受講者の意欲を喚起し、課題を解決するため熱量を醸成するものである。例えば、実際に新教材を使い、受講者を児童役に見立て模擬授業のスタイルで紹介していくことが想定される。また、デジタル教材を操作する様子を実際の授業場面として見



図4 出前講座のイメージ

ることも含まれる。今回の出前講座では①の時間よりも②を重点的に取り組むことで研修効果を上げようと考えた。

ウ 模擬授業、ICTの紹介へ着眼した理由

なぜ、模擬授業、ICTの紹介に重点を置くことにしたのか、以下の2点に整理した。

1点目は、理論、事例から学ぶ場についてはカスケード研修が充実しているためである。平成26年度から英語教育推進リーダー中央研修が5年間計画で実施され、中央研修で学んだ小学校の英語教育推進リーダーが、域内の中核となる小学校教員を対象とした研修の講師となり、研修成果の普及を実施するという研修システムである。これを受講した中核教員がその内容を校内研修で伝達することで、①の理論、実践事例の紹介を学ぶ場がOJTを通してあったからである。

2点目は、小学校教員の指導に対する強みを活かしたことである。多くの教科等を一人で教えることの多い小学校教員の特長の一つとして、「0」レベルからの挑戦には不安が大きい、何かしらの提案により「1」レベルに上がると、そこからアレンジを加え、「2」レベルや「3」レベルにも高めていく力があると、経験上考えたからである。

加えて、出前講座という性格上、各小学校に出向き、その学校の全員の先生方に講座を実施する場合、今まで中核教員の先生方が実施されてきた校内研修（1点目にあたる）を補完するものにしていくことが望ましいと考えた。

これらのことより、まず授業の実際を体感し、それを基に、学ぶ児童の姿をイメージしながら、提案の模擬授業を児童の実態に応じてアレンジし、「2」レベルや「3」レベルの授業へと高めていこうと意欲を持ってもらうことで、より授業改善が進むと考えた。

(3) 出前講座の担当者の視点～中学校英語科教員からの考察～

担当者として、今回の出前講座の構想、実施、改善、効果測定をする中で感じたことを、中学校英語科教員の立場で述べる。

ア 小中ペアでの担当者の利点

出前講座の担当者として、常に小学校教員と中学校英語科教員が一緒に出向いた。このようにペアを組むことの強みを以下の2点に整理した。

1点目は、講座中の即時対応が可能で、より受講者の課題意識に応じた内容にできることである。外国語教育の経緯等を踏まえた質問や発音等英語の詳細については中学校英語科教員が答える。繰り返し英語の表現を学ぶという説明がピンとこない場合は、階段を上るように学びを積み上げる算数の指導項目を例に、比較しながら小学校教員が答える。このように小学校教員が説明することで、受講者がほっとした表情をする場面を数多く見てきた。逆に中学校英語科教員が発音する英語をゴールと捉えてしまい緊張する場面も見てきた。双方が補完し合う講座スタイルは好評であったと感じる。

2点目は、担当者のリフレクションを踏まえた講座の改善である。「3 研究の方法」及び「4 結果」の項でも述べたが、講座内容は変わらずともその進行の仕方、比重や焦点化については様々に工夫できる。担当者2人が思ったことや感じたことを率直に出し合い、より

よい講座へと改善する意欲を持って取り組むことで、徐々に受講者の満足度が高まる講座へと質が高まったと感じている。

イ 小学校教員の強み

出前講座で熱心に学ぶ小学校の先生方の姿に感動する場面が多くあった。若い先生方と経験豊富な先生方とがペアになって学ぶ様子が見られた。多くの先生方は英語指導力を向上させ、自信を持って児童の前に立つことを一番に考えておられるのではないだろうか。勿論それは大切なことであるが、子どもの学びを全体的に捉えることができる小学校教員の強みを活かして、国語教育との関連をカリキュラム・マネジメントの視点で取り組んだり、前思春期など発達段階を踏まえた文字指導を全校体制で考えたりすることも同時に進めていくことが必要ではないかと思う気持ちが強まった。昨年度の研究内容も踏まえ、「6 結論」で続けたい。

6 結論

(1) 外国語学習モデルプランの提案

昨年度の研究で、「児童に気付きを促し、日本語と英語のバランスを図りながら学ばせる」ための3つの提案を行った昨年度の研究（京都府総合教育センターホームページ）。これらの3つの提案を各学校において一体的・総合的に実施することを重ねて提案し結論とする。

小学校における英語学習モデルプランの提案

<p>目的 平成30年の先行実施期間から、「児童に気付きを促し、日本語と英語のバランスを図りながら学ばせる」モデルプランを提案する。</p> <p>方法 1 国語教育と外国語教育との効果的な連携を図る。 2 「気付き」「発見」から始める文字学習を行う。 3 新教材（先行実施期間）の指導方法を習得する。</p> <p>提案1 国語教育と外国語教育との効果的な連携 母語で考え、英語や日本語の特徴やまじりに気付く 国語学習→外国語学習へというプロセスで指導する。</p> <p>(1) 国語の学習を基盤とした10の連携授業案 (別紙1：光村図書の教科書教材で作成。)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>指導内容</th> <th>追加時間数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>かたかなをかこうもの名まえ</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">2年</td> <td>主語と述語</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>かたかなで書くことば</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">3年</td> <td>ローマ字</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>修飾語</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td></td> <td>コンピュータのローマ字入力</td> <td>1~2</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>ばらばら言葉を聞き取ろう</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>文の組み立て</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">6年</td> <td>生活の中の言葉</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>日本で使う文字</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table> <p>(2) 特長 ア 国語の学習から英語の特徴やまじりに気付く。</p> <p>提案2 「気付き」「発見」から始める文字学習 ローマ字学習（小3上）後に、気付き・発見的な学習で文字学習をスタートさせる。 (1) 先行研究から ア 英文書写は、英語学習の基盤となる態度と実際の英語運用能力を育成する。【英語コミュニケーション能力育成方法 宇田和子 佐々木良介 2008】 イ 前思春期は、自分のやってみたくことや、やらなければならないことに対して、一生懸命に努力を積み上げる姿勢（「勤勉性」）を養う大切な時期である。【学校不適応の未然防止のために</p>	学年	指導内容	追加時間数	1年	かたかなをかこうもの名まえ	1	2年	主語と述語	1	かたかなで書くことば	1	3年	ローマ字	1	修飾語	1		コンピュータのローマ字入力	1~2	4年	ばらばら言葉を聞き取ろう	0	5年	文の組み立て	2	6年	生活の中の言葉	1	日本で使う文字	2	<p>(2) 学習計画</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>書くことの指導目標</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3年</td> <td>へボン式ローマ字が読めて、書き写せる。自分の名前や身近な地名を書ける。</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>アルファベットの大文字・小文字を四線に正確に書き写せる。身の回りにあるアルファベット表示を読める。</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>ローマ字と英語のつづりを比べ、共通点や相違点に気付く。目的を持ってアルファベットの大文字・小文字を書ける。</td> </tr> <tr> <td>6年</td> <td>自分のことや友達のことなどについて発表した英文を正確に書き写せる。</td> </tr> </tbody> </table> <p>(3) 留意点 ア 児童の勤勉性を養うとともに、劣等感を抱きながらも周囲から認められることで勤勉性が勝り、「自分ではできるんだ」という成就感の積み重ね（「有能感」）が得られるような指導と評価を行う。 イ 補助教材を活用する。（例：英語学習につながるへボン式ローマ字の練習、英語の文字発見！ノート、Hi, friends plus のワークシート） ウ 学力向上プランに基づき、授業と家庭学習とをリンクさせた指導にする。</p> <p>提案3 新教材（別紙2）を活用した指導方法 (1) 「何の力を付けるための活動であるか」を明確にした学習指導計画にする。この授業を積み重ねると、英語力が付くということを見通し自身が実感できる授業を行う。 【Check!】 □教科指導が特別活動になっていないか。 □型どおり行うことや活動をこなすことばかりに気を取られていないか。 ※小学校教員の英語教育意識調査（別紙3）【平成27・28年度京都府10年経験者研修で実施】 (2) 文部科学省が準備をする新教材の作成意図に基づいて活用する。 【Check!】 □レベルを上げすぎていないか。</p> <p>今後 国語学習→は発想としてはあり得るが、その効果を検証したい。前思春期の捉えをベースにした実践は他教科も含め学校全体で取り組みたい。 今後は、研究協力校等にこれらの提案を行い、一体的に取り組んでみる方向性を模索したい。</p>	学年	書くことの指導目標	3年	へボン式ローマ字が読めて、書き写せる。自分の名前や身近な地名を書ける。	4年	アルファベットの大文字・小文字を四線に正確に書き写せる。身の回りにあるアルファベット表示を読める。	5年	ローマ字と英語のつづりを比べ、共通点や相違点に気付く。目的を持ってアルファベットの大文字・小文字を書ける。	6年	自分のことや友達のことなどについて発表した英文を正確に書き写せる。
学年	指導内容	追加時間数																																							
1年	かたかなをかこうもの名まえ	1																																							
2年	主語と述語	1																																							
	かたかなで書くことば	1																																							
3年	ローマ字	1																																							
	修飾語	1																																							
	コンピュータのローマ字入力	1~2																																							
4年	ばらばら言葉を聞き取ろう	0																																							
5年	文の組み立て	2																																							
6年	生活の中の言葉	1																																							
	日本で使う文字	2																																							
学年	書くことの指導目標																																								
3年	へボン式ローマ字が読めて、書き写せる。自分の名前や身近な地名を書ける。																																								
4年	アルファベットの大文字・小文字を四線に正確に書き写せる。身の回りにあるアルファベット表示を読める。																																								
5年	ローマ字と英語のつづりを比べ、共通点や相違点に気付く。目的を持ってアルファベットの大文字・小文字を書ける。																																								
6年	自分のことや友達のことなどについて発表した英文を正確に書き写せる。																																								

図5 外国語学習モデルプラン例

ア 国語教育と外国語教育との効果的な連携

この視点で取り組むことで、小学校教員に、「ことば」を学ばせるという意識が生まれるのではないだろうか。例えば低学年では、音の違いを楽しませたり、「ことば」の共通性に着目させたりして「ことば」の面白さに気付かせる。

(例) 児童の姿として

(1・2年生から抜粋)

- ・「りんご」は「アップル」と言うと思っていたけど、ちょっと言い方が違って面白かったです。(1年)
- ・主語と述語の順番は日本語も英語も同じであることが分かりました。
- ・国語の教科書は縦書きだけど、それ以外の教科書は横書きです。英語も横書きです。
- ・日本語は続けて書くけど、英語は I と swim の間にスペースがあります。
- ・日本語は「。」だけど、英語は「.」で文が終わっています。(2年)

教員の意識改革に基づく授業改善により、児童は発達の段階や学習内容を踏まえて、国語と英語とを比較しながらそれぞれの特徴について学ぶ。このことは、グローバル化の社会を生きるための共通性や多様性を学ぶことにつながる。「ことば」を学習主体とする教科の連携により、児童の学びが広がったり深くなったりすると考える。

現在、10の学習指導略案しかないが、趣旨を活かした実践が広がることを期待する。これは外国語教育を推進するための小学校教員の強みを活かす実践となると考える。

イ 「気付き」「発見」から始める文字学習

当総合教育センター教育相談部の研究成果を踏まえ、前思春期(自分のやってみたいことや、やらなければならないことに対して、一生懸命に努力を積み上げる姿勢(「勤勉性」)を養う大切な時期)の特徴と文字指導の進め方を相互に関連させた指導計画を立てると効果的ではないかと考える。児童は、やるべきことが明確で、努力した成果が見え、その成果に対してしっかりと評価がされれば意欲的に学ぶものである。決して英語の文字を書くから英語への学習意欲が減退したり、英語が嫌いになったりするのではない。これも外国語教育を推進するための小学校教員の強みを活かす実践となる。

ウ 新教材を活用した指導方法

児童の学ぶ意欲を高める工夫された教材が文部科学省から提示されている。その特徴や活用する方法を習得し、ICTの活用も含め効果的に活用することである。当総合教育センター出前講座も校内研修を補完するために活用できる。

現在、新教材を活用した指導方法の習得以外は、外国語教育推進のアプローチとしてほとんど意識が向いていないのが現実である。しかし強調したいのは、小学校文化に根付く外国語教育、小学校教員の強みを活かす実践を行うためには、「ことば」の学習への意識改革、前思春期など発達の段階を踏まえた長期の指導計画が必要である。母語である日本語を、全児童に習得させる優れた指導方法を持っている小学校教員が、それを外国語の習得にも活かせる点はないかと検証してみる視点をもつことが必要である。

(2) OJTを補完するセンター研修講座の創設

本年度の研究で、「1学年1学級の小学校におけるカリキュラム・マネジメント～地域の特性を生かした教育課程づくりの素地を提案する～」を行った（図6）。

資料4 1学年1学級の小学校におけるカリキュラム・マネジメント ～地域の特性を生かした教育課程づくりの素地を提案する～

1 研究の目的

京都府において、1学年1学級の学校数及び地域を調べ、その傾向を基に、各学校間の連携方法を考察することにより、より積極的な連携を提案する。

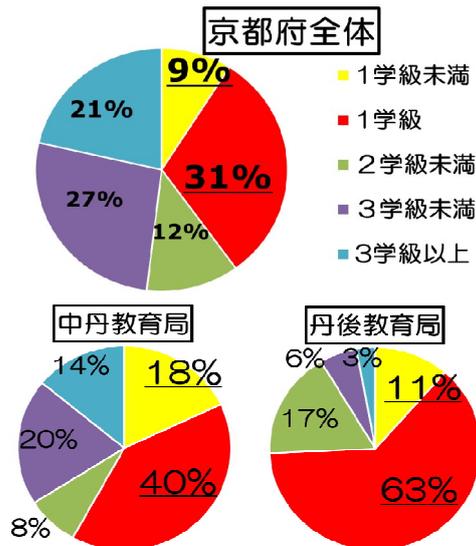
2 研究の方法

- (1) 1学年1学級の地域別傾向を調査…公立学校基本数調査の分析
- (2) 各学校の人材育成面の状況把握…教師力向上アドバイザーの学校訪問での聞き取り
- (3) 管理職が考える人材育成の把握…京都府小学校校長会による調査

3 北部地域の1学年1学級の現状

（平成28年度学校基本調査：京都府教育委員会）

※1学年1学級以下が府全体は40%であるが、中丹局58%、丹後局74%である。



4 教師力向上アドバイザーからの聞き取り

（平成29年度中丹・丹後教育局管内の学校訪問において校長との面談から）

- ・小規模化が進み、教職員が減り、出張などの重なりがあり、外部での研修の場が減っている。
- ・若手教員に対しては、保護者対応、学級経営、特別活動、危機管理などの視点に危機感を持っている。

・センター研修講座に実技も含め、実践力の向上につながる内容を期待している。

5 現場の管理職の意識

「平成29年度学校力の向上を目指す校長のリーダーシップ」京都府小学校校長会発行

◎若手教員にはどんな資質能力を高める必要を感じますか（複数選択可）

保護者対応…75.2%（項目内1位）

学級経営…73.3%（項目内2位）

教科指導…69.5%（項目内3位）

6 考察

- ・若手教員は学校を離れての研修は難しい面がある。
- ・北部地域は6割から7割の学校は学年団がなく、学年のことは自分一人で解決するしかなく、手探りで指導力のアップを図っていることが推測できる。
- ・大量退職、大量採用から、学ぶべき先輩が少なくなっていることも考えられる。

7 結論（目指す方向）

- (1) アメーバ型（メンター制度）での指導力向上
中学校区単位などを活用し、教科の枠を超え、1人の先輩教員に複数の若手教員をつけ、児童生徒を理解すること、声掛けの効果的な実施などについて授業を通して学ぶ。

(2) OJTを補完するセンター講座の創設

①実践力向上型の講座を開設

1日で2種類の講義が受講できる「どんとこい形式の講座」（講座名にどんとこい！と付けたことからそう呼んでいる）を増やす。平成29年度実施の音楽&家庭科、理科&図工に加え、平成30年度は、幼小連携音楽&図工、保護者連携&外国語を創設した。学校で先輩から学ぶように講座を受講してもらえようことを期待している。

②学校組織力が高まる講座を開設

校長、教頭には、現代的な教育課題についての先駆的な講師を招聘し、最新の教育動向を伝えていく。教務主任には、若手教員を巻き込んだ校内研修の方法をより実践的な方法で伝えていく。

図6 1学年1学級の小学校におけるカリキュラム・マネジメントに関する研究

この研究を基盤に、今回の小学校外国語教育の出前講座で得た知見を活かし、平成30年度新規講座として若手教員対象の「基礎力パワーアップ講座～小学校編～」を創設した（図7）。

小学校において1学年1学級であることが多い北部地域にどのようにアプローチしていくかの視点をもちつつ策定した講座の特徴として以下に2点述べる。

講座番号	426	体系区分	専門研修	主催	京都府総合教育センター
平成30年度 基礎力パワーアップ講座～小学校編～ 実施要項					
講座のねらい	児童、保護者とのよりよい関係を築くために必要となる知識や技能について理解する。 新学習指導要領に示された外国語にかかわって、授業づくりの基礎的・基本的なポイントについて学ぶ。				
京都府教員等の資質能力の向上に関する指標との対応	ステージ1 初任期（1年～6年） 観点：生徒指導 ・児童生徒理解をもとに、受容的・共感的に児童生徒と関わることができる。 ステージ1 初任期（1年～6年） 観点：学習指導 ・各教科等の教材研究に取り組み、指導技術を高めることができる。				
受講対象 定員	教諭（小学校、義務教育学校及び特別支援学校小学部） ※教職経験6年目までの教諭は受講が望ましい。 50名				
日時	平成30年 8月 2日（木） 13:00～17:00				
会場	京都府総合教育センター北部研修所				
13:00	講義 I		賞賛の重要性		
			・人間の行動の原理を理解し、教育現場で活用できる指導の在り方について学ぶ。		
13:30	京都府総合教育センター		研究主事兼指導主事 南田 高典		
13:30	演習 I		傾聴的態度について		
			・児童や保護者とのよりよい関係づくりのために、必要となる受容と共感に基づく傾聴的態度について学ぶ。		
14:40	京都府総合教育センター		研究主事兼指導主事 由良 渉		
14:50	講義 II		小学校外国語教育の進め方		
			・小学校外国語の授業づくりに関する指導方法について学ぶ。		
17:00	京都府総合教育センター 京都府総合教育センター		研究主事兼指導主事 大槻 裕代 研究主事兼指導主事 入矢 完		
その他	・携行品……小学校学習指導要領（平成29年告示）附属（外国語活動・外国語編） Let's Try! 1、2 We Can! 1、2 ・担当部……地域教育支援部 TEL：0773-43-2934				

図7 OJTを補完するセンター研修講座

ア 模擬授業スタイルの活用

今回の出前講座での受講者アンケートには、「45分間の授業はどのようなものか実際を見ることで授業の準備が明確になった」「自分自身がどのような力量を上げていくことが大切であるか理解できた」などの感想が多く聞かれた。多くの教員がいる大規模校であれば、先輩教員の授業を参観するなどして、授業の心構えや準備物の共有も図れるが、そうでない場合、どのような授業を行えばよいか実際に学ぶ場面は少ない。模擬授業を体験する中で受講者が自らの力量アップへの足掛かりとなるように促していることがこの講座の特徴である。

イ 小学校の教員と外国語が専門の教員とのペア講師の活用

「5 考察(3) 中学校英語科教員から」でも述べているように、外国語が専門である教員と小学校の教員が同じ講座の中にいることで、受講者が外国語の指導法に対して専門的で難しいと感じたことを、小学校籍の教員が他教科の指導方法を例に出しながら、指導方法の同一性を紹介することで意欲の向上を促していることが特徴である。

文献

- 直山木綿子(2017). 小学校新学習指導要領に向けて 移行期間に何をすべきか 教員の指導力向上と校内研修のあり方 英語情報秋号, 4-9.
- 京都府教育委員会(2016). 京都府教育振興プランーつながり、創る、京の知恵ー
- 山本雅哉ら(2016). 学校不適應の未然防止ために ～ 小学校3・4年生(前思春期)という時期とは ～ 京都府教育委員会
- 山本雅哉ら(2017). 学校不適應の未然防止ためにⅡ ～ 小学校3・4年生(前思春期)への大切な関わり～ 京都府教育委員会
- 赤沢真世(2014). 小学校外国語活動 文字学習パンフレット 英語の文字 発見! ノート
- 山本玲子ら(2015). 英語学習につながるへボン式ローマ字の練習
- 西岡加名恵(2008). 逆向き設計で確かな学力を保障する 明治図書
- 中森誉之(2013). 外国語はどこに記憶されるのか 学びのための言語学応用編 開拓社
- 泉恵美子ら(2015). 英語科・外国語活動の理論と実践 あいり出版